

重点課題	重点目標	目標達成に向けた取り組み(担当課)	評価の観点	評価	評価指標の達成度と活動計画の実施状況	総合評価	所見	次年度への課題 今後の改善方針
1 生徒指導の推進	①他人を思いやる優しさや豊かな人間性の育成に努める。	①生徒との面談を実施し、生徒理解を深める。(生徒指導)	面談が生徒理解・生徒指導に有効であったとする担当が80%以上であった。面談が生徒理解・生徒指導に有効であったとする担当が70%以上であった。面談が生徒理解・生徒指導に有効であったとする担当が50%以上であった。面談が生徒理解・生徒指導に有効であったとする担当が50%未満であった。	A B C D	未回答が55.9%だった。新型コロナウイルス感染症、新型コロナウイルス感染症予防対策があった。	B	各クラス状況に応じて面談実施を考慮した結果であるが、積極的に取り組めなかった。	未回答が55.9%だったので次年度は解答があるように啓発に努める。
		②教育相談・特別支援教育の研修を実施する。(生徒指導)	研修が教育相談体制の充実に役立ったとする職員が80%以上であった。研修が教育相談体制の充実に役立ったとする職員が70%以上であった。研修が教育相談体制の充実に役立ったとする職員が50%以上であった。研修が教育相談体制の充実に役立ったとする職員が50%未満であった。	A B C D	ポジティブな行動支援をテーマに大阪樟蔭女子大学田中善大先生から講義・演習を実施した。役立ったとする職員は100%であった。		職員がグループワークに積極的に取り組み、好評であった。	実施後のアンケート結果を参考に教職員の要望を取り入れた研修を実施する。
	②社会のルールや校則を厳守させ、規範意識の向上を図る。	①定期的に服装・頭髪検査を実施する。(生徒指導)	違反者数が0になった。全体で違反者数が10人未満になった。違反者数が前年度とほぼ同数であった。違反者数が前年度より増加した。	A B C D	アンケートにおいては、服装や頭髪など身だしなみに関わる校則が守れていると生徒96.6%(昨年度91.0%)・保護者の95.9%(昨年度95.6%)が回答しているが、現状を鑑みて、指導・支援を拡充していく必要性を感じる。	B	身だしなみ検査において、生徒・保護者の意識は非常に高い。一昨年度から比較すると昨年度、今年度と遅刻が減少傾向にある。	身だしなみ検査においてアンケート結果と現状に差を感じる。一方、意識はここ数年高いことを感じている。引き続き、啓発指導を行う。
		②毎日、通学指導(挨拶・身だしなみ・通学マナー)を行い遅刻者数の減少を目指す。(生徒指導)	遅刻者数が全校生の前年度の遅刻者数より10%以上減少した。遅刻者数が全校生の前年度の遅刻者数を下回った。遅刻者数が全校生の前年度の遅刻者数を上回った。遅刻者数が全校生の前年度の遅刻者数より10%以上増加した。	A B C D	出欠統計より遅刻者数は全体の0.8%(昨年度1.2%)であり、減少した。		遅刻指導については一定の効果があると考えられるので、引き続き継続指導を行う。	
		③学校の生徒指導の方針を明確に示し、教職員の共通理解を図る。(生徒指導)	教職員の指導目標に対する達成度が90%以上であった。教職員の指導目標に対する達成度が80%以上であった。教職員の指導目標に対する達成度が50%以上であった。教職員の指導目標に対する達成度が30%以上であった。	A B C D	教職員(97%)からは、十分な共通理解が図れ、指導目標を達成できた。		新型コロナウイルス感染症対策の為に、大きく影響を受けざるを得なかった活動があった。しかし、各連携諸機関と連携を図る工夫も多くあった。	
		④登校時の交通マナーの向上と、自転車マナーの順守を図る。(生徒指導)	定期的に生活委員が駐輪マナーを呼びかけ、大きく効果を上げた。定期的に生活委員が駐輪マナーを呼びかけ、効果を上げた。不定期ではあるが生活委員が駐輪マナーを呼びかけ、効果を上げた。不定期の実施となり、効果が上がらなかった。	A B C D	新型コロナウイルス感染症・新型コロナウイルス感染症予防対策の為に、積極的活動を行うことができなかった。		新型コロナウイルス感染症予防対策は今年度以降も継続される可能性が高いため、工夫をこらした対応が必要不可欠となる。	
		⑤教職員・PTA・生活安全委員で協力し、交通安全の啓発のための安全指導・交通マナーアップキャンペーンを行う。(生徒指導)	教職員・PTA・生活安全委員で協力し、計画通りに実施することができた。定期的実施することができた。不定期ではあるが、実施することができた。実施することができなかった。	A B C D	新型コロナウイルス感染症・新型コロナウイルス感染症予防対策の為に、学校への入場機会が大きく制限したので、積極的活動を行うことができなかった。			
		⑥長期休業中に校外巡視を実施する。(生徒指導)	年3回以上実施し、問題行動等未然防止に成果をあげた。年2回実施した。年1回実施した。全く実施できなかった。	A B C D	新型コロナウイルス感染症・新型コロナウイルス感染症予防対策の影響を受けたが、北地区生徒生活連絡協議会巡視を活用して行った。			
		⑦補導センター・警察に学期ごとに訪問し、情報交換に努める。(生徒指導)	十分意見交換ができ、生徒指導に活かすことができた。毎月訪問をし、十分な意見交換ができた。毎月訪問したが、十分な意見交換ができなかった。毎月訪問できなかった。	A B C D	新型コロナウイルス感染症・新型コロナウイルス感染症予防対策の影響を受けたので、訪問は十分ではなかったが、意見交換は積極的に行なった。			
	③生徒理解を深め、個に応じた生徒指導に努める。	①問題行動等を起こした生徒や、良好な学校生活のできていない生徒の保護者に対する面談を実施する。(生徒指導)	保護者と共通理解を図り、生徒に対する支援に成果を上げた。保護者との共通理解は図れたが、生徒に対する支援の成果は不十分であった。保護者との共通理解は図れたが、生徒に対する支援の成果を上げられなかった。保護者との共通理解を図ることができなかった。	A B C D	保護者と共通理解を積極的に図り、問題行動等や良好な学校生活のできていない生徒の保護者に対して各担任・各学年・生徒指導課で行った。	A	新型コロナウイルス感染症予防対策の為にタブレット端末の有効利用を感じた。	タブレット端末の有効利用から、生徒の個人情報管理が優れているために意見を吸い上げやすくなっているため、積極的なタブレット端末利用が求められる。
②いじめ防止等のためにアンケートを実施する。(生徒指導)		年2回以上実施し、いじめ等を未然防止に成果をあげた。年2回実施した。年1回実施した。全く実施できなかった。	A B C D	いじめアンケートをタブレット端末で2回実施した。	いじめアンケートをタブレット端末で行った結果、今まで出てこなかった意見が出てきた。			

重点課題	重点目標	目標達成に向けた取り組み(担当課)	評価の観点	評価	評価指標の達成度と活動計画の実施状況	総合評価	所見	次年度への課題今後の改善方策
2 環境教育・安全 教育の推進	①生命を尊重し、心身の健康と安全・感染症予防・防災意識の高揚をはかり、自他の安全を守る能力を育成する。	①心肺蘇生・AED訓練を実施し、応急手当の知識や技術の習得を図る。(保健環境)	心肺蘇生・AED訓練に参加し、知識と技術を習得することができた教職員が80%以上であった。 心肺蘇生・AED訓練に参加し、知識と技術を習得することができた教職員が70%以上であった。 心肺蘇生・AED訓練に参加し、知識と技術を習得することができた教職員が50%以上であった。 心肺蘇生・AED訓練に参加し、知識と技術を習得することができた教職員が50%未満であった。	Ⓐ B C D	新型コロナウイルス感染拡大防止に配慮した実技演習を実施することで、「習得できた」が100%であり、達成できたと考ええる。	A	新型コロナウイルス感染拡大防止に配慮した、心肺蘇生・AED訓練や定期健康診断を実施するため、学校医や研修会の講師と相談し、最善を尽くした予防策をとることができた。	心肺蘇生・AED訓練は、定期的・継続的に実施することが大切なので、次年度も引き続き継続する。 定期健康診断の受診率を100%にするために、保護者や部活動の顧問の協力が欠かせない。定期的な声かけをし、家庭の事情でどうしても受診できない場合は次年度に必ず受診するよう指導を続けていく。 AEDの設置場所および使用方法について、年次が上がるごとに認知度が上がっている。保健だよりやポスター、保健の授業などで啓発活動を続けていく。
		②健康について関心を持たせ、疾病異常の早期発見のため、健康診断の受診や事後措置の徹底を図る。(保健環境)	健康診断受診率が100%であった。 健康診断受診率が95%以上であった。 健康診断受診率が90%以上であった。 健康診断受診率が90%未満であった。	A Ⓑ C D	歯科・眼科・耳鼻科の欠席者は保護者へ依頼しているため全員受診が難しい。他の検診については100%受診できている。			
		③生活習慣に関する調査を実施し、活用する。(保健環境)	調査結果が生徒理解・生徒指導に役立ったとする担当が80%以上であった。 調査結果が生徒理解・生徒指導に役立ったとする担当が70%以上であった。 調査結果が生徒理解・生徒指導に役立ったとする担当が50%以上であった。 調査結果が生徒理解・生徒指導に役立ったとする担当が50%未満であった。	Ⓐ B C D	「有効であった」が100%であり、達成できたと考ええる。			
		④保健だよりやホームルームでの啓発等あらゆる機会を捉えてAEDの設置場所について周知を図る。(保健環境)	AEDの設置場所・使用方法を知っている生徒が80%以上であった。 AEDの設置場所・使用方法を知っている生徒が70%以上であった。 AEDの設置場所・使用方法を知っている生徒が50%以上であった。 AEDの設置場所・使用方法を知っている生徒が50%未満であった。	Ⓐ B C D	AED講習会は開催できなかったため認知度は低いが、設置場所を知っているのは73.1%、使用方法を知っているのは89.1%と昨年度より若干向上した。			
	②校内美化に努め、情操豊かな学校環境づくりに努める。	①毎日の清掃や大掃除を積極的に行わせ、学習環境を自ら整えさせる。(保健環境)	意欲的に清掃に取り組んだ生徒が80%以上であった。 意欲的に清掃に取り組んだ生徒が70%以上であった。 意欲的に清掃に取り組んだ生徒が60%以上であった。 意欲的に清掃に取り組んだ生徒が60%未満であった。	Ⓐ B C D	多くの生徒が、清掃に対して意欲的に取り組んでいる。校内の美化に努め、学習環境の整備に対して高い意識を持っている。	A	学習環境の整備に関しては、多くの生徒が取り組む姿勢を持っている。日々の清掃やゴミの分別などに意欲的に取り組み、環境作りに取り組んでいる。	環境整美委員による清掃チェックを定期的に行い、清掃に対する意識付けを行う必要がある。ゴミの分別やポイ捨ての防止については掲示物等を用いて取り組まなければならない。霧気を作ることが重要であると考えられる。日頃の指導をこまめに行うことが学習環境作りにつながると思われる。
		②ホームルームにおいてゴミの分別(新学校版環境ISO)に対する意識の高揚を図る。(保健環境)	ゴミの分別ができている生徒が90%以上であった。 ゴミの分別ができている生徒が80%以上であった。 ゴミの分別ができている生徒が70%以上であった。 ゴミの分別ができている生徒が70%未満であった。	Ⓐ B C D	多くの生徒がゴミの分別に対して、高い意識を持っている。ゴミの分別に対する知識だけではなく、分別に取り組む意識も持っている。			
		③ゴミ処理の意識の高揚を図る。(保健環境)	校内でゴミのポイ捨てが無く、ゴミ箱に捨てられ、余計なゴミの持込も無い。 校内でゴミのポイ捨てが少なく、ゴミ箱に捨てられ、余計なゴミの持込も少ない。 校内でゴミのポイ捨てがあり、余計なゴミの持込もやや多い。 校内でゴミのポイ捨てが多く、余計なゴミの持込も多い。	Ⓐ B C D	校内には多少のゴミは見受けられるが、ポイ捨ては少なく、ゴミ箱がきちんと活用されている。			
	③防災・減災教育を推進し、地域防災の即戦力および将来の担い手を育成する。	①防災訓練を実施し、防災拠点としての役割を正しく認識している。(保健環境)	全教職員の80%以上が防災体制が確立していると感じている。 全教職員の70%以上が防災体制が確立していると感じている。 全教職員の60%以上が防災体制が確立していると感じている。 防災体制が確立していると感じている教職員が60%未満であった。	Ⓐ B C D	本校は、南海トラフ地震や津波の影響を受ける可能性があるため、教職員の多くが防災に対して高い意識を持っている。	A	本校が地域の防災拠点であることを理解しており、災害時における避難行動に対する知識や意識が高いと考えられる。	地域の防災拠点としての役割を教職員へ周知し、有事の際には適切な対応をできるようにしておかなければならない。生徒への災害時の指導をより一層徹底しなければならない。
		②防災教育や防災計画を通して、防災準備(避難グッズや経路の確認)率を高める。(保健環境)	防災準備が整った生徒が80%以上であった。 防災準備が整った生徒が70%以上であった。 防災準備が整った生徒が60%以上であった。 防災準備が整った生徒が60%未満であった。	Ⓐ B C D	生徒は、本校の環境を理解しており、防災に対して高い意識を持っている。避難訓練でも意欲的に取り組んでいる。			

重点課題	重点目標	目標達成に向けた取り組み(担当課)	評価の観点	評価	評価指標の達成度と活動計画の実施状況	総合評価	所見	次年度への課題今後の改善方策
3 特別活動の推進	①ホームルーム活動・生徒会活動や学校行事を活性化させ、自主性や実践的な態度を育成する。	①生徒会を中心としたあいさつ運動や清掃奉仕活動等が毎月計画的に企画・運営され、多くの生徒が活動に参加するように支援する。(特別活動)	生徒会や専門委員会が中心となり企画運営ができ、毎月実施した。生徒会や専門委員会の一部の生徒で実施した。実施はしたが、不定期であった。実施しなかった。	A B C D	あいさつ運動においては計画に沿って毎月実施し、生徒会が積極的に運営することができた。	A	あいさつの励行や清掃奉仕活動などでは部活動の生徒が積極的に取り組んでいた。また競技力、実績共に向上した部が多く、学校の活性化に繋がった。学校行事においては、81.3%の生徒が「楽しく参加できた」または「達成感が得られた」と感じており、更に生徒が意欲的に活動できる環境を整えていた。	各専門委員会の活動の活性化を図るため、役員の選定方法などを見直す必要がある。
		②生徒会を中心とした生徒主体の球技大会・学校祭が企画・運営されるように支援する。(特別活動)	生徒会が中心となり、自発的に企画運営でき、各行事が円滑に行われた。生徒会が中心となり、各行事を実施できた。生徒会が中心となり企画したがあまり協力を得られず運営が円滑ではなかった。生徒会や専門委員会が機能しなかった。	A B C D	学校行事の一部に関しては生徒会が自発的に企画を提案し、運営する場面も見受けられた。計画・運営においては教員始動ではあるが、生徒会が中心となって実施した。			
		③学校行事において、個人の個性が活かせ、積極的にできるように支援する。(特別活動)	一人一人の個性が十分に発揮された。一人一人の個性がおおむね発揮された。一部の生徒のみの活動であった。生徒の個性が発揮されず、活気が感じられなかった。	A B C D	クラスや各種委員会での役割を分担したり、文化的・体育的な活動の場を増やすことで、生徒一人一人の個性が発揮されていた。			
		④専門委員会活動の活性化を図るため、各専門委員会の役割を明確にし責任を果たせるように支援する。(特別活動)	70%以上の生徒が役割を自覚し、その責任を果たせた。60%以上の生徒が役割を自覚し、その責任はおおむね果たせた。役割は自覚していたが、あまりその責任を果たすことができなかった。役割の自覚が十分でなく、その責任を果たせなかった。	A B C D	役割を自覚し、その責任をおおむね果たせた生徒が68.0%であった。昨年より19.6%減少した。			
	②部活動を推進し、スポーツ活動において質の高い専門教育を行い、競技力の向上を図るとともに、スポーツ振興に寄与する人材を育成する。	①部活動の意義について理解し、計画的に実施し生徒の自主的・自発的活動を支援する。(特別活動)	部活動の年間計画に沿って活動ができ、その目標を達成することができた。年間計画に沿った活動がほぼできたが、目標の達成には及ばなかった。年間計画通りの活動があまりできず、目標の見直しの必要性を感じた。年間計画に沿った活動ができず、各部の方針や目標を達成することができなかった。	A B C D	70.6%の部活動が年間計画に沿って活動ができ、その目標を達成することができたと答えている。(生徒指数63.1%)	A	部活動の登録者数は8割を超えるが、活動をしていない生徒も多く、登録方法や意欲の低い生徒の指導について検討していきたい。	
		②部活動を推進するため、関係機関との連携や、指導方法について工夫し、専門性を高め競技力の向上を図る。(特別活動)	昨年度実績より競技力が向上した。昨年度実績とほぼ同等の競技力であった。昨年度実績よりやや競技力が低下した。昨年度実績より大幅に競技力が低下した。	A B C D	「昨年度よりも競技力が向上した」、あるいは「昨年度と同等の競技力であった」と体育部顧問70.6%の指導者が答えている。			
	③ボランティア活動を積極的にいき、豊かな人間性を育てる。	①自分自身の生活する学校や地域社会において起こる課題の解決に対して、自分自身が自発的・主体的にその問題を解決していこうとする。(特別活動)	ボランティア活動の意義を理解し、主体的・積極的に参加し、継続できた。ボランティア活動の意義を理解し、主体的・積極的に参加した。積極的ではなかったが、周りがやっていたので活動には参加した。ボランティア活動は何もしなかった。	A B C D	学校の内外でのボランティア活動について広報するとともに、生徒の活動を盛り上げた。ボランティア活動の意義を理解し、主体的・積極的に参加した生徒が27.7%であった。授業では講演会を通して地域社会への親しみや世界の文化の理解を進めた。また、インターアクト部は校内草抜き、学校周辺～撫養駅まで清掃活動、県高校青少年赤十字協議会秋季学習会参加、赤い羽根共同募金活動等積極的に行うことができた。	B	積極的に地域に対し、ボランティアをしようとする生徒がいると同時に生徒に対するアンケートでは「あまり興味がなく参加しなかった」という関心のない生徒が40.7%と多かった。	自分自身の所属する学校や地域社会に対して愛着を持ち、問題解決をしていこうという態度を生徒に持たせるために、学校行事、生徒総会、清掃活動などを充実させていく。

重点課題	重点目標	目標達成に向けた取り組み(担当課)	評価の観点	評価	評価指標の達成度と活動計画の実施状況	総合評価	所見	次年度への課題今後の改善方策
4 学習指導の充実	①基礎的・基本的な事項の指導を徹底し、基礎学力の向上定着を図る。	①生徒が理解しやすいように配慮した授業をする。(教務)	生徒の85%以上が授業が分かると感じている。 生徒の75%以上が授業が分かると感じている。 生徒の65%以上が授業が分かると感じている。 生徒の65%未満が授業が分かると感じている。	Ⓐ B C D	ほとんど理解できているが42.3%、半分ぐらいは理解できている52.1%で94.4%の生徒は理解できている。	A	教材・教具の工夫や電子黒板・タブレット等のICTの活用についての研修も今後さらに必要である。	研修等を通じて、電子黒板やタブレット等のICT活用を一層推進し、効果的な学習指導に努める。(授業理解)
		②定期考査に向けて学習計画を立てて考査に臨ませる。(進路指導)	学習計画を立てて、考査の勉強も十分できた生徒の割合が50%以上であった。 学習計画を立てなかったが、考査の勉強は十分できた生徒の割合が50%以上であった。 学習計画を立てて、考査の勉強も十分できた生徒の割合が50%未満であった。 学習計画を立てなかったが、考査の勉強は十分できた生徒の割合が50%未満であった。	A B Ⓒ D	計画の有無にかかわらず、考査の勉強が十分にできた生徒は58.7%であったが、計画を立てて勉強も十分にできた生徒は19.5%にとどまった。		計画を立てた生徒は半数以上いるので、実行できるよう継続的に働きかける必要がある。	
		③始業チャイムを生徒とともに聞く。(教務)	毎授業チャイムを教室で聞いた教員が80%以上であった。 毎授業チャイムを教室で聞いた教員が70%以上であった。 毎授業チャイムを教室で聞いた教員が60%以上であった。 毎授業チャイムを教室で聞いた教員が60%未満であった。	Ⓐ B C D	97.1%の教員がほぼ毎授業チャイムで授業が開始できている。		時間割や教室割りについて再度工夫する必要がある。	
		④各教科において、資格や検定受検を積極的に薦め、指導・支援する。(進路指導)	検定の基本級合格率が55%以上であった。 検定の基本級合格率が50%以上であった。 検定の基本級合格率が50%未満であったが、受験者数が増加した。 検定の基本級合格率が50%未満で、受験者数も減少した。	Ⓐ B C D	検定の基本級合格率は72.0%であった。		進路を見据えて、積極的に検定を受けており、この傾向を維持することが大切である。	
	②幅広い選択科目を設定し、生徒一人ひとりの興味・関心・進路に応じた履修指導を推進する。	①個別の相談体制を充実させ、個々の生徒に応じた時間割の作成に努める。(教務)	生徒の90%以上が十分な相談体制のもと時間割を作成できたと感じている。 生徒の80%以上が十分な相談体制のもと時間割を作成できたと感じている。 生徒の70%以上が十分な相談体制のもと時間割を作成できたと感じている。 生徒の70%未満が十分な相談体制のもと時間割を作成できたと感じている。	Ⓐ B C D	91.3%の生徒が十分な相談体制で時間割を作成できたと感じている。	A	履修検討会議で個々の生徒について丁寧に検討している取り組みを継続するとともに、進路指導課とも協力し、進路希望と履修についてのリンクを強化する必要がある。	生徒への説明資料の充実や相談体制の構築により、個々の生徒のニーズに対応していく。
		②生徒の個性・進路に合った科目選択をさせる。(教務)	生徒の時間割満足度が90%以上であった。 生徒の時間割満足度が80%以上であった。 生徒の時間割満足度が70%以上であった。 生徒の時間割満足度が70%未満であった。	Ⓐ B C D	93.0%の生徒が科目選択に満足している。			
	③生徒の学習意欲を引き出す指導体制・指導方法の工夫改善を図る。	①学習週間・面接週間を設け、学習の習慣化を図り、面接を効果的に利用する。(教務)	生徒の90%以上が学習週間・面接週間の取組が良かったと感じている。 生徒の80%以上が学習週間・面接週間の取組が良かったと感じている。 生徒の70%以上が学習週間・面接週間の取組が良かったと感じている。 生徒の70%未満が学習週間・面接週間の取組が良かったと感じている。	A B Ⓒ D	78.0%の生徒が面接週間の取組が良かったと感じている。	A	具体的なテーマの設定等、面接週間について、進路指導課や生徒指導課と協調していく必要がある。	「主体的・対話的で深い学び」の視点から、より一層、授業改善に取り組むことが必要である。
		②全員が学力向上に向けて個人目標を設定し、取り組みを推進する。(教頭)	育成評価システムにおける学習指導の評価B以上が全教員の90%以上であった。 育成評価システムにおける学習指導の評価B以上が全教員の80%以上であった。 育成評価システムにおける学習指導の評価B以上が全教員の70%以上であった。 育成評価システムにおける学習指導の評価B以上が全教員の70%以上であった。	Ⓐ B C D	分かりやすい授業に向けて、教材研究を重ねるとともに、ICTを活用した授業づくりに取り組んだ。		新学習指導要領の円滑な実施やGIGAスクール構想の実現に向けて、積極的に教材研究や校内研修に取り組むことができた。	
		③教員相互間の授業見学および研究授業を実施し、指導方法向上を目指す。(学力向上)	教員の全員が指導方法向上に向けた取り組みを行った。 教員の90%以上が指導方法向上に向けた取り組みを行った。 教員の80%以上が指導方法向上に向けた取り組みを行った。 教員の80%未満しか指導方法向上に向けた取り組みを行えなかった。	Ⓐ B C D	教員の全員が相互授業参観や研究授業に参加したと答えた。			

【令和3年度 徳島県立鳴門渦潮高等学校 学力向上実行プラン】

重点課題	重点目標	目標達成に向けた取り組み(担当科)	評価の観点	評価	評価指標の達成度と活動計画の実施状況	総合評価	所見	次年度への課題今後の改善方策
4 学習指導の充実	①基礎的・基本的な指導を徹底することで基礎学力の向上定着を図る。	日々の渦高タイムと確認テスト後の補習や再テストの実施を確実に、基礎学力の向上と定着につなげる。(1年次)	日々の渦高タイムと確認テスト後の補習や再テストが100%実施できた。 日々の渦高タイムと確認テスト後の補習や再テストの実施が80%以上100%未満であった。 日々の渦高タイムと確認テスト後の補習や再テストの実施が70%以上80%未満であった。 日々の渦高タイムと確認テスト後の補習や再テストの実施が70%未満であった。	A B C D	日々の渦高タイムと確認テスト後の補習や再テストが100%実施できた。	A	渦高タイムへ取り組む意欲を高め、一度で合格できるよう指導を継続していきたい。	日々の渦高タイムの時間に学んだことを定着できるよう繰り返し指導したい。
		正副担任で日々の渦高タイムの指導を行い確認テスト後の補習や再テストを実施し、基礎学力の向上と定着につなげるよう徹底する。(2年次)	日々の渦高タイムと確認テスト後の補習や再テストが100%実施できた。 日々の渦高タイムと確認テスト後の補習や再テストの実施が80%以上100%未満であった。 日々の渦高タイムと確認テスト後の補習や再テストの実施が70%以上80%未満であった。 日々の渦高タイムと確認テスト後の補習や再テストの実施が70%未満であった。	A B C D	日々の渦高タイムと確認テスト後の補習や再テストが100%実施できた。		確認テストの不合格者は減少しつつあるが、一度で合格できるよう指導を継続していきたい。	日々の渦高タイムの時間に学んだことを定着できるよう繰り返し指導したい。
		正副担任で日々の渦高タイムの指導を行い確認テスト後の補習や再テストを実施し(1学期)、基礎学力の向上と定着につなげるよう徹底する。(3年次)	日々の渦高タイムと確認テスト後の補習や再テストが100%実施できた。 日々の渦高タイムと確認テスト後の補習や再テストの実施が80%以上100%未満であった。 日々の渦高タイムと確認テスト後の補習や再テストの実施が70%以上80%未満であった。 日々の渦高タイムと確認テスト後の補習や再テストの実施が70%未満であった。	A B C D	日々の渦高タイムと確認テスト後の補習や再テストが100%実施できた。		渦高タイムの意義を理解し、前向きに取り組めるよう指導を継続していきたい。	日々の渦高タイムの時間に学んだことを定着できるよう繰り返し指導したい。
		社会で役立つ基礎的言語能力の定着を図るための課題(週末課題、授業の課題プリント)として、提出率90%以上を目指す。(国語科)	課題提出率が90%以上であった。 課題提出率が80%以上であった。 課題提出率が80%未満であった。 課題提出率が70%未満であった。	A B C D	週末課題および授業課題の提出率は90%以上達成することができた。		課題をやることで力が付くように確認テストなどをこまめに実施する。	
		基礎的・基本的な事項を確認させるため週末課題や授業の課題プリント提出率の90%以上を目指す。(数学科)	課題の提出率が90%以上であった。 課題の提出率が70%以上90%未満であった。 課題の提出率が50%以上70%未満であった。 課題の提出率が50%未満であった。	A B C D	週末課題及び授業の課題共に提出率90%以上を達成することができた。		教科担任が提出期限を細かく設定し、未提出者が固定化しないよう徹底した指導を継続したい。	
		授業ノートの提出率および「進路実現のための勉強をしている」と実感できている生徒を増やす。(地歴公民科)	授業ノートの提出率および進路実現に役立つと実感できる生徒が90%以上であった。 授業ノートの提出率および進路実現に役立つと実感できる生徒が80%以上であった。 授業ノートの提出率および進路実現に役立つと実感できる生徒が70%以上であった。 授業ノートの提出率および進路実現に役立つと実感できる生徒が70%未満であった。	A B C D	授業ノートの提出率および進路実現に役立つと実感できる生徒が90%以上であった。		提出物を提出する習慣を身に付けてきている。期限遵守させ、進路につながるのを継続して指導する。	提出を確実にさせると同時に、提出書類の仕上がりレベルも上がるよう指導していきたい。
		科学的な思考力・判断力の育成のために、実験や授業の課題プリント等、課された提出物の提出率100%を目指す。(理科)	課題の提出率が100%を達成した。 課題の提出率が90%以上であった。 課題の提出率が80%以上であった。 課題の提出率が80%未満であった。	A B C D	授業ノート、課題プリント、実験レポート共に提出率90%以上であった。		課題提出の習慣が学習習慣の定着につながると思われる。今後も指導を継続していきたい。	課題内容のさらなる充実と、未提出の傾向のある生徒に対して粘り強く指導していく。
		英語を用いて意思疎通が図れるよう、基礎学力を定着させるために、授業の課題プリント等、課された提出物の提出率100%を目指す。(英語科)	課題の提出率が100%を達成した。 課題の提出率が90%以上であった。 課題の提出率が80%以上であった。 課題の提出率が80%未満であった。	A B C D	週末課題及び授業の課題共に提出率90%以上であった。		提出物の指導は基礎学力の向上・定着に不可欠である。今後も継続していきたい。	課題プリントの内容もさらに充実させ、未提出者については粘り強く指導していきたい。
		ICT機器の活用やグループでの意見交換、発表などを充実させ、毎時間の目標を明確にし、積極的に学習活動ができる態度を養う。(保健体育科)	生徒の80%が授業が楽しく、目標達成に向け前向きに取り組めたと感じている。 生徒の70%が授業が楽しく、目標達成に向け前向きに取り組めたと感じている。 生徒の60%が授業が楽しく、目標達成に向け前向きに取り組めたと感じている。 生徒の50%が授業が楽しく、目標達成に向け前向きに取り組めたと感じている。	A B C D	見学者の割合が数%で落ちつき、参加率が高まった。		感染症の影響があり測定環境が変わっており、体づくりを丁寧に進めたい。	現状把握させ、体力の向上を意識づける。
		ビジネスにおけるコンプライアンスの意識や商業習慣・スキルを身につけるために課題提出率の向上を目指す。(商業科)	課題の提出率が90%以上であった。 課題の提出率が70%以上90%未満であった。 課題の提出率が50%以上70%未満であった。 課題の提出率が50%未満であった。	A B C D	ビジネスマナーと検定資格取得をもとに指導し、提出物は100%で落ち着いた学習活動が出来た。		少しずつであるが学習の成果も上がっている。	生徒の伸びしろを潰さないよう、可能な限り学習の機会を生かす工夫を考える。
		計画的に処理する能力を身につけるために実習後の報告書を正確で期限内に提出できることを目指す。(工業科)	報告書の提出率が100%であった。 報告書の提出率が80%以上であった。 報告書の提出率が60%以上であった。 報告書の提出率が60%未満であった。	A B C D	100%の提出率であった。		7割以上の生徒が、 \times 切日前に提出完了したと回答しており、時間に対する意識が向上した。	提出率以外にも報告内容や提出期限も重要指導項目として取り組む予定である。
		生活に必要な基礎的な知識・技術の定着を図るために提出物の提出率90%以上を目指す。(家庭科)	レポートの提出率が90%以上であった。 レポートの提出率が70%以上90%未満であった。 レポートの提出率が50%以上70%未満であった。 レポートの提出率が50%未満であった。	A B C D	家庭科の授業において、97%の生徒が提出することができた。		日ごろから提出物を意識して、プリントやノートを整理し、まとめることができていた。	レポートの内容に自分の意見や考えなどの項目を入れ、自己評価につなげたい。
		社会福祉・介護福祉検定合格に向け知識の定着を図るため、授業の課題プリント提出率90%以上を目指す。(福祉・看護科)	課題の提出率が90%以上であった。 課題の提出率が70%以上90%未満であった。 課題の提出率が50%以上70%未満であった。 課題の提出率が50%未満であった。	A B C D	課題の提出率は80%であった。		提出すべきプリントをなくしたり、期限が守れないことがあったが、全て提出することができた。	毎時間プリントをファイルに綴れているか確認する。タブレットを効果的に活用する。
情報活用に必要な基礎的な知識・技術の定着を図るために授業提出物の提出率90%以上を目指す。(情報科)	提出率が90%以上であった。 提出率が70%以上であった。 提出率が50%以上であった。 提出率が50%未満であった。	A B C D	課題の提出率はおおむね80%以上であった。	一部の生徒がノートやプリントをなくしたり、期限が守れないことがあった。	提出物を成績に反映するなどして、提出率の向上に努めたい。			
学習した表現力や鑑賞力を活かして制作した作品や、学習内容を記録したプリント等を確実に提出させる。(芸術科)	課題の提出率が100%以上であった。 課題の提出率が80%以上であった。 課題の提出率が60%以上であった。 課題の提出率が60%未満であった。	A B C D	80%以上が課題を提出できた。	提出するプリントの保管が十分でない生徒が少数いた。作品等の提出はほぼできた。	プリントの管理方法を徹底させ、未提出生徒への声かけを早めに行う。			

【令和3年度 徳島県立鳴門渦潮高等学校 学力向上実行プラン】

4 学習指導の充実	②幅広い選択科目を設定し、生徒一人ひとりの興味・関心・進路に応じた履修指導を推進する。	日本漢字能力検定3級の合格者を昨年度より2%以上、上げる。(国語)	3級受検者のうち、昨年度より合格者が2%以上増加した。 3級受検者のうち、昨年度より合格者が1%増加した。 3級受検者のうち、合格者が昨年度並みであった。 3級受検者のうち、合格者が昨年度より減少した。	A B C D	3級受験者の合格率が33%であり、昨年より大幅に増加した。2級合格者も増えた。	A	受かりたいと頑張る生徒が多かったため、合格者を増やすことができた。	さらに上の級を目指す意欲を引き出すために、動機付けをしていきたい。
		実用英語技能検定3級受検者の合格率を上げる。(英語科)	3級受検者のうち、合格者が60%以上であった。 3級受検者のうち、合格者が50%以上であった。 3級受検者のうち、合格者が40%以上であった。 3級受検者のうち、合格者が40%未満となった。	A B C D	各級の合格率については、2級が30%、準2級は63.5%、3級は100%であった。		他検定との日程重複などもあったが、生徒はよく努力し、さらに上の級を目指している。	受検者数がさらに上位級を合格できるようサポートしていきたい。
		進路開拓につなげるための検定合格率の向上をめざす。(商業科)	各種検定合格率の平均が60%以上であった。 各種検定合格率の平均が55%以上であった。 各種検定合格率の平均が50%以上であった。 各種検定合格率の平均が50%未満であった。	A B C D	基幹科目である簿記3級の検定では約80%の合格率に至った。		系列選択生徒の意識も年々高まり3科目1級を取得する生徒も出てきている。	今後はビジネス系検定の取組で3科目以上1級の取得を目標に学習を進めたい。
		進路選択の幅を広げるためICTの活用により、工業系の免許取得率を上げる。ただし検定は除く。(工業科)	免許取得率の平均が50%以上であった。 免許取得率の平均が40%以上であった。 免許取得率の平均が30%以上であった。 免許取得率の平均が30%未満であった。	A B C D	免許取得率は、41.3%であった。		ICT技術で生徒の理解状況を分析しフィードバックしたことで、昨年度の28%から向上した。なお検定においては84.8%、技能修了証取得は100%であった。	免許状を取得することだけを目標とした学習スタイルにせず、免許を持つ技術者としての姿勢も育てていく。
		家庭科技術検定の技術指導においてICTを活用し指導することにより、食物・被服・保育分野において合格率80%以上を目指す。(家庭科)	検定の合格率が90%以上であった。 検定の合格率が80%以上90%未満であった。 検定の合格率が70%以上80%未満であった。 検定の合格率が70%以下であった。	A B C D	家庭科技術検定の食物・被服・保育分野において3・4級の合格率が96%であった。		作り方の動画を視聴することにより理解することができた。	実技を伴う検定のため、不得意な生徒に対し繰り返し練習ができるよう粘り強く指導していく。
		資格習得につながるパソコン・タブレット端末の基礎技能習得を支援する。(情報科)	生徒の80%以上がパソコン・タブレット端末の基本操作を習得している。 生徒の70%以上がパソコン・タブレット端末の基本操作を習得している。 生徒の60%以上がパソコン・タブレット端末の基本操作を習得している。 生徒の60%未満がパソコン・タブレット端末の基本操作を習得している。	A B C D	90%以上の生徒が基本操作を習得している。		ほとんどの生徒がパソコン・タブレットの操作には慣れている。	基本操作の習得とともに、トラブルへの対応能力を向上させたい。

【令和3年度 徳島県立鳴門渦潮高等学校 学力向上実行プラン】

4	学習指導の充実	③生徒の学習意欲を引き出す指導体制・指導方法の工夫・改善を図るとともに、生徒一人一台端末を整備し、運用を円滑に進める学習活動の充実を図る。	ICTを活用し、生徒の学習意欲を高める。また、グループワークも適宜取り入れ、課題解決に向けてのコミュニケーション能力の育成につなげる。(国語科)	教材や指導が工夫されており、わかりやすい授業であったと感じた生徒が90%以上であった。教材や指導が工夫されており、わかりやすい授業であったと感じた生徒が80%以上であった。教材や指導が工夫されており、わかりやすい授業であったと感じた生徒が70%以上であった。教材や指導が工夫されており、わかりやすい授業であったと感じた生徒が70%未満であった。	A B C D	電子黒板やタブレットが完備されてからは、ICTを活用する授業が増えた。	B	感染症のためグループワークが制限されるが、ペアやグループでの活動も取り入れながら学習意欲を高められた。	タブレットを用いての意見交換や相互評価を取り入れ、生徒の興味関心を引けるよう指導していきたい。
			問題集などの補助教材も適宜使用し、生徒の学習意欲向上につなげる。ICT活用や生徒の理解度に応じた問題演習を通して、生徒自らが考え解決する態度を養う。(数学科)	生徒の80%以上が授業が楽しく、目標達成に向け前向きに取り組めたと感じている。生徒の70%以上が授業が楽しく、目標達成に向け前向きに取り組めたと感じている。生徒の60%以上が授業が楽しく、目標達成に向け前向きに取り組めたと感じている。生徒の60%未満が授業が楽しく、目標達成に向け前向きに取り組めたと感じている。	A B C D	質問に対して「当てはまる」「やや当てはまる」の合計が62.0%であった。		わかりやすい授業の実践が不十分であったと感じる。さらなる生徒の理解度の把握の必要性を感じた。	生徒の理解度に応じた問題演習を通して生徒自ら考え解決する態度を養い、授業が楽しいと思う生徒を増やしたい。
			視聴覚教材や新聞などを教材として利用し、有用と実感できている生徒を増やす。(地歴公民科)	年間3回以上のICT機器の利用および工夫がされていると実感できる生徒が90%以上であった。年間2回以上のICT機器の利用および工夫がされていると実感できる生徒が80%以上であった。年間1回以上のICT機器の利用および工夫がされていると実感できる生徒が70%以上であった。年間0回以上のICT機器の利用および工夫がされていると実感できる生徒が70%未満であった。	A B C D	年間2回以上のICT機器の利用および工夫がされていると実感できる生徒が80%以上であった。		電子黒板やタブレットを融合させて、教材研究をすることができた。さらに、教材を増やしていきたい。	他校の取り組みなども参考にしながら、主体的な学びを引き出せる教材研究に教師間で意見を出し合いながら進めていく。
			ICT活用や実験観察を通して生徒の興味・関心の向上を図る。また、座学の科目においても活用を工夫する(理科)	各科目において5回以上実施した。各科目において3回以上5回未満実施した。各科目において2回以上3回未満実施した。各科目において年平均1回未満実施した。	A B C D	実験観察を各科目において2回程度実施できた。電子黒板導入後は、ICT活用の機会が増えてきている。		実験データをタブレットで処理するなど、理科としてもっと効果的に使える場面があると思われる。	デジタル教材や電子黒板を積極的に活用し、興味関心だけでなく科学的な思考力の向上につなげていく。
			ICT活用や共通ワークシートを使用し学習意欲の向上を図る。活動中心の授業を行い、表現能力を養う。(英語科)	教材や指導が工夫されており、集中して授業に取り組めたと感じた生徒が90%以上であった。教材や指導が工夫されており、集中して授業に取り組めたと感じた生徒が80%以上であった。教材や指導が工夫されており、集中して授業に取り組めたと感じた生徒が70%以上であった。教材や指導が工夫されており、集中して授業に取り組めたと感じた生徒が70%未満であった。	A B C D	ワークシートに基づき、様々な言語活動を行い、電子黒板も効果的に利用した。		ワークシートの内容に沿ってプレゼンテーション形式で授業を行うことで、学習内容の定着にも貢献している。	電子黒板やタブレットを効果的に利用し、さらに興味・関心や表現力を高められるようにしていきたい。
			体づくり運動や楽しく運動することを学び、基礎体力の向上を図る。(保健体育)	新体力テストのA・B評価の生徒の割合が10%向上した。新体力テストのA・B評価の生徒の割合が5%向上した。新体力テストのA・B評価の生徒の割合が昨年度と同率であった。新体力テストのA・B評価の生徒の割合が減少した。	A B C D	感染症に配慮しながらも、限られた環境の中で体力向上を図った。		コロナ禍にあっても健康や体力向上は必要不可欠であることを理解させることが大切である。	生徒の体力向上の課題に向けた個人の現状把握や課題を見つけるような工夫をする必要がある。
			ICT技術の活用による自学自習の態度を養い、自己実現につながる学習意欲の向上を目指す。(商業科)	生徒の80%以上がICT技術を利用して自学自習し、目標達成に向け前向きに取り組めたと感じている。生徒の70%以上がICT技術を利用して自学自習し、目標達成に向け前向きに取り組めたと感じている。生徒の60%以上がICT技術を利用して自学自習し、目標達成に向け前向きに取り組めたと感じている。生徒の60%未満が授業が楽しく、目標達成に向け前向きに取り組めたと感じられていない。	A B C D	系列選択生徒の全員がコンピュータを利用した学習活動の深化に取り組むことが出来た。		プレゼンテーションのスキルを向上させる機会が必要と考える。	情報処理の授業の中でプレゼンテーションのスキルアップに取り組む。
			ICTも活用した実習を通して、技能習得を重要視する意識の向上を目指す。(工業科)	80%以上の生徒が、技能習得を重要であると意識している。70%以上の生徒が、技能習得を重要であると意識している。60%以上の生徒が、技能習得を重要であると意識している。60%未満の生徒が、技能習得を重要であると意識している。	A B C D	96%の生徒が技能習得を重要と捉えている。		昨年73.9%から上昇した。将来活かせる技能が習得できるため関心が高い。	技能の習得により、産業社会への興味、関心が高くなるような指導を目指す。
			授業で学習した内容を生かし、各家庭における課題解決に向けての取り組みの研究(ホームプロジェクト・レポート)の提出90%以上を目指す。(家庭科)	ホームプロジェクト・レポートの提出率が90%以上であった。ホームプロジェクト・レポートの提出率が70%以上90%未満であった。ホームプロジェクト・レポートの提出率が50%以上70%未満であった。ホームプロジェクト・レポートの提出率が50%以下であった。	A B C D	期日が遅れた生徒はいたが、89%の生徒が提出することができた。		事前に、手順を示したプリントを用いて進め方や注意点を説明したことが意欲に結びついた。	課題研究に慣れていない生徒が多いので、プレゼンでの発表動画等も参考とできるよう紹介していきたい。
			ICTを適宜活用し進路実現につながる学習意欲の向上を目指し、実習に生かすことができる思考力・判断力・表現力を養う。(福祉・看護科)	生徒の80%以上が授業が楽しく、前向きに取り組めたと感じている。生徒の70%以上が授業が楽しく、前向きに取り組めたと感じている。生徒の50%以上が授業が楽しく、前向きに取り組めたと感じている。生徒の49%未満が授業が楽しく、前向きに取り組めたと感じている。	A B C D	80%の生徒が授業が楽しく前向きに取り組めたと感じている。		授業の内容や進め方によって、タブレットを効果的に活用し、興味・関心を持って自主的に取り組める授業内容を検討する。	タブレットを効果的に活用し、興味・関心を持って自主的に取り組める授業内容を検討する。
			タブレット端末や補助教材を適宜使用し、生徒の学習意欲の向上につなげ、課題について自ら考えようとする態度を養う。(情報科)	生徒の80%以上が授業が楽しく、前向きに取り組めたと感じている。生徒の70%以上が授業が楽しく、前向きに取り組めたと感じている。生徒の50%以上が授業が楽しく、前向きに取り組めたと感じている。生徒の50%未満が授業が楽しく、前向きに取り組めたと感じている。	A B C D	80%の生徒が授業が楽しく前向きに取り組めた。		ICT機器の不具合やトラブルが多く、もっとスムーズに学習ができる環境が必要である。	タブレットの不具合や不慣れな生徒への対応を適切に行えるスキルを身につける必要がある。
			毎時間生徒の実態に即した目標を明確にし、ICTも活用して、生徒自らが思考力・判断力・表現力を身につけようとする態度を養う。(芸術科)	生徒80%以上が授業に意欲的に取り組み、目標達成に向け努力することができたと感じている。生徒70%以上が授業に意欲的に取り組み、目標達成に向け努力することができたと感じている。生徒60%以上が授業に意欲的に取り組み、目標達成に向け努力することができたと感じている。生徒50%以上が授業に意欲的に取り組み、目標達成に向け努力することができたと感じている。	A B C D	80%の生徒が授業に意欲的に取り組み、それぞれの目標を達成している。		コロナ感染対策で制限される活動もあるが、生徒は設定された課題にしっかり取り組んでいる。	ICTの活用を積極的に行い、各自の学習目標をより明確にした学習内容に改善する。

重点課題	重点目標	目標達成に向けた取り組み(担当課)	評価の観点	評価	評価指標の達成度と活動計画の実施状況	総合評価	所見	次年度への課題今後の改善方策
5 進路指導の徹底	①生徒一人ひとりの学力や適性などを的確に把握し、個に応じたきめ細やかな指導を徹底する。	①面談を通じて生徒の学力・適性・個性を把握する。(進路指導)	面談を活用し、十分な生徒理解と、進路に対するアドバイスができた。面談を活用し、おおむね生徒理解ができた。面談を実施したが、満足のいく生徒理解ができなかった。面談を実施できなかった。	A B C D	「役立った」が48.3%、「少し役立った」が39.7%との回答であった。(合計88.0%)	B	進路指導において、不可欠な生徒理解については面談が非常に大きな役割を果たしている。複数回の面談により、めまぐるしく変化する入試等への心構えができ、落ち着いて取り組むことができたと思われる。	進路に関する情報の提供及び共有はより迅速に行う必要がある。また、担任との連携も欠かせない。資料についてはWebでの提供が増えているので、その利点を活用できるよう、検討を重ねていきたい。
		②進路対策会議を実施する。(進路指導)	必要な情報を共有し、進路指導に十分活用することができた。必要な情報を共有することはできたが、十分活用することができなかった。必要と感じる情報を共有することができなかった。進路対策会議を実施しなかった。	A B C D	「大変役立った」が41.2%、「少し役立った」が26.5%との回答であった。(合計67.7%)			
		③生徒一人一人の進路実現に向けての支援体制を拡充する。(進路指導)	支援体制について生徒の80%以上が満足した。支援体制について生徒の70%以上が満足した。支援体制について生徒の50%以上が満足した。支援体制について生徒の50%未満しか満足しなかった。	A B C D	「そう思う」が61.9%、「少しはそう思う」が31.7%との回答であった。(合計93.6%)			
	②スポーツ科学科・総合学科の特性を考慮したキャリア教育を推進する。	①インターンシップ、大学・専門学校訪問を行い、事前事後の指導を充実させる。(企画)	参加生徒の80%以上が満足した。参加生徒の70%以上が満足した。参加生徒の50%以上が満足した。参加生徒の50%未満しか満足しなかった。	A B C D	インターンシップを実施できなかったが、それに替えて進路別学習や面接指導を実施した。「次年度に大変活かせる」46.1%、「少し活かせる」39.1%であった。(合計85.2%)	A	昨年度に続き、今年度もインターンシップ、大学・専門学校訪問が実施できなかったが、その分進路別学習や面接指導、講演・出前講座等を充実させるよう工夫した。また、産社・総探・総学の内容や課題研究発表会には多くの生徒が満足しており成果が現れた。	次年度は方法を工夫して実施できるよう検討したい。
		②1年次総合学科における「産社」、2年次・3年次の「総探」「総学」の内容を充実させる。(企画)	生徒の80%以上が「産社」「総探」「総学」の授業に満足した。生徒の70%以上が「産社」「総探」「総学」の授業に満足した。生徒の50%以上が「産社」「総探」「総学」の授業に満足した。生徒の50%未満しか「産社」「総探」「総学」の授業に満足しなかった。	A B C D	「授業内容が大変よかった」31.7%、「良かった」35.3%、「普通」21.6%との回答であった。(合計88.6%)			今年度も新型コロナウイルスの影響で多くの変更があったが、反省を次年度に活かし内容を再検討したい。
		③総学の「課題研究発表会」を充実させる。(企画)	生徒の80%以上が発表会に満足した。生徒の70%以上が発表会に満足した。生徒の50%以上が発表会に満足した。生徒の50%未満しか発表会に満足しなかった。	A B C D	39%が「大変満足した」、42.4%が「満足した」と回答した。(合計81.4%)			年次団、企画課で協力し、発表内容や発表方法のさらなる工夫・改善をしていきたい。
		④スポーツ科学科の進路に対して大学等を含め情報提供に努める。(進路指導)	進路情報の提供について、スポーツ科学科生徒の80%以上が満足した。進路情報の提供について、スポーツ科学科生徒の70%以上が満足した。進路情報の提供について、スポーツ科学科生徒の50%以上が満足した。進路情報の提供について、スポーツ科学科生徒の50%未満しか満足しなかった。	A B C D	「大変満足した」が40.7%「満足した」が42.3%との回答であった。(合計83.0%)			8割以上の生徒が満足しており、継続的に実施したい。
	③進路設計や進路選択に必要な情報提供を組織的・計画的に行い、生徒一人ひとりの勤労観・職業観の育成を図る。	①進路講演会、講話、ホームルーム活動を通じて生徒の職業観・勤労観に努める。(進路指導)	進路情報の提供について、生徒の80%以上が満足した。進路情報の提供について、生徒の70%以上が満足した。進路情報の提供について、生徒の50%以上が満足した。進路情報の提供について、生徒の50%未満しか満足しなかった。	A B C D	「役立った」が44.5%、「少し役立った」が40.3%との回答であった。(合計84.8%)	A	8割以上の生徒が満足しており、この取り組みは継続して行っていきたい。	状況によっては外部講師を迎えての講演会を実施することも検討したい。「進路のしおり」については進路を取り巻く状況に応じて改訂を行い、よりよいものとしたい。
		②ホームルーム活動を含め、進路のしおりを活用する。(進路指導)	進路のしおりを利用した生徒が80%以上であった。進路のしおりを利用した生徒が70%以上であった。進路のしおりを利用した生徒が50%以上であった。進路のしおりを利用した生徒が50%未満であった。	A B C D	3年次で「よく活用した」が51.6%、「少し活用した」が28.7%との回答であった。(合計80.3%)			

重点課題	重点目標	目標達成に向けた取り組み(担当課)	評価の観点	評価	評価指標の達成度と活動計画の実施状況	総合評価	所見	次年度への課題今後の改善方策
6 人権教育推進	①各教科・科目・ホームルーム活動・「産業社会と人間」総合的な学習の時間等全ての教育活動に人権尊重の理念を定着させる。(人権教育)	①各教科・科目・ホームルーム活動・「産業社会と人間」総合的な学習の時間等全ての教育活動に人権尊重の理念を定着させる。(人権教育)	各教科の人権教育の学習評価で、「大変満足した」「満足している」の合計が80%以上であった。各教科の人権教育の学習評価で、「大変満足した」「満足している」の合計が70%以上であった。各教科の人権教育の学習評価で、「大変満足した」「満足している」の合計が50%以上であった。各教科の人権教育の学習評価で、「大変満足した」「満足している」の合計が40%以上であった。	A B C D	外部講師を招いての人権学習の視点を取り入れた授業展開を実施し、生徒の取り組みは大変良好であった。人権教育の満足度89.6%。	A	各教科における学習や「産業社会と人間」総合的な探求の時間」において、人権尊重を根底に据えた学習指導が展開され、アンケートでは、「人権ホームルームに満足している」が89.6%だった。コロナ禍の中、生徒の評価は概ね良好な結果となっている。夏期休業中の課題にしている人権意見作文はほとんどの生徒が提出できた。そして、それを校内人権意見発表会につなげているが、発表者の人権問題に対する真摯な気持ちが聴取者に伝わり、人権意識の向上につなげることができた。ZOOMによるオンライン配信だったので3年次生も内容を共有できたことは大変有意義だった。教職員研修会等の人権に関する講演会は、饗場和彦先生による「北朝鮮問題と人権教育」をご講演いただいた。北朝鮮による拉致問題を日本人の立場だけでなく北朝鮮や世界の中での問題として捉え、人権教育の大切さと本来の意味での人権教育について考えることができた。人権HR研究授業や総合的な探求の時間	新型コロナウイルス感染症防止対策を踏まえた中で、本校の特色(スポーツ科学科と総合学科や防災拠点校など)を生かした人権教育のあり方を考える必要があると思われる。生徒が自らの課題として人権問題をとらえ、主体的に取り組もうとする指導計画の充実をめざす。いじめなどの身近な差別事象に対して、対応できる態度を育てる。
		②人権学習ホームルーム活動を柱として、人権や命の大切さを根底に捉えた人権教育や道徳教育を推進する。(人権教育)	人権学習ホームルーム活動に「大変満足した」「満足している」生徒が70%以上であった。人権学習ホームルーム活動に「大変満足した」「満足している」生徒が60%以上であった。人権学習ホームルーム活動に「大変満足した」「満足している」生徒が50%以上であった。人権学習ホームルーム活動に「大変満足した」「満足している」生徒が40%以上であった。	A B C D	生徒の主体性を重視した人権ホームルーム活動を目指し、各担当が指導計画の工夫に努めたことにより、生徒の評価は良好な結果が得られた。			
		③人権意見作文や研修・講演会等の感想を書くことで、人権意識の向上を目指す。(人権教育)	全校生徒の90%以上が感想文を提出した。全校生徒の80%以上が感想文を提出した。全校生徒の70%以上が感想文を提出した。全校生徒の60%以上が感想文を提出した。	A B C D	人権意見作文は殆どの生徒からの提出が得られた。しかし、新型コロナウイルス対策のため人権に関する講演会は中止をしたが、映画会は年次ごとの分散開催で実施した。校内意見発表会は各教室でZOOMによるオンライン配信をして開催した。			
	②地域や家庭と連携した人権教育を推進する。	①教職員間の人権意識向上を目指した研修会を実施する。(人権教育)	研修後、今後の人権教育の向上に役立つと感じた教職員が80%以上であった。研修後、今後の人権教育の向上に役立つと感じた教職員が70%以上であった。研修後、今後の人権教育の向上に役立つと感じた教職員が60%以上であった。研修後、今後の人権教育の向上に役立つと感じた教職員が50%以上であった。	A B C D	「研修会が人権教育の向上に役立った」が97%だった。今年度は講師を招いての講演会は実施できた。感染対策をした職員研修や学校行事等で有意義な活動はできた。	A	研修会や講演会が中止になる中で、出来ること(人権HR、校内意見発表会、人権を考える日など)を実施してきた。今後も継続する中で、次年度はLGBT(セクシャルマイノリティ)や北朝鮮拉致問題について学ぶことにより、人権意識の向上につなげたい。	
		②鳴門市人権文化祭や県内各種人権問題の大会や研修会に積極的に参加する。(人権教育)	鳴人祭、各種人権大会等に参加した教職員が全体の60%以上であった。鳴人祭、各種人権大会等に参加した教職員が全体の50%以上であった。鳴人祭、各種人権大会等に参加した教職員が全体の40%以上であった。鳴人祭、各種人権大会等に参加した教職員が全体の40%未満であった。	A B C D	コロナ禍のため各種の人権大会や行事にできる限り多数の教職員が参加できることをめざし、年度当初に参加計画を立てた。感染対策によりリモート開催や文書開催に変わったが、積極的に参加できた。			
	③自主活動の活性化に努める。	①人権委員会、人権意見発表会、校内自主活動、「中・高生による人権交流集会」等への生徒の積極的参加を促す。(人権教育)	校内外の各種人権関係行事の生徒の参加数は、60名以上であった。校内外の各種人権関係行事の生徒の参加数は、50名以上であった。校内外の各種人権関係行事の生徒の参加数は、40名以上であった。校内外の各種人権関係行事の生徒の参加数は、40名未満であった。	A B C D	校内人権問題意見発表会は、全年次が各教室で参加できるようZOOMによるオンライン配信で開催できた。すべてのクラスから発表者を得ることができ、生徒の参加状況は良好であった。「中・高生による人権交流集会」は本校が中部ブロックのサテライト校になり、社会問題研究部が事前研修や集会当日にも積極的に参加し、活発な活動があった。	A	人権委員会および社会問題研究部の活動の活性化に向けて、具体的な方策を明らかにする。	

重点課題	重点目標	目標達成に向けた取り組み(担当課)	評価の観点	評価	評価指標の達成度と活動計画の実施状況	総合評価	所見	次年度への課題 今後の改善方策	
7 読書活動の推進	①生徒の自主的な読書活動を推進する。	学級文庫の利用を促進する。 (図書情報)	学級文庫を利用した生徒が50%以上であった。 学級文庫を利用した生徒が30%以上であった。 学級文庫を利用した生徒が20%以上であった。 学級文庫を利用した生徒が20%未満であった。	Ⓐ Ⓑ _○ Ⓒ Ⓓ	54.5%の生徒が利用した。	A	学級文庫を利用した生徒のうち18.2%は「よく利用した」と回答。読書習慣のある生徒が少数でも、充実した学級文庫の配置が必要である。授業での新聞活用は科目によって難易度に差があるようである。またホームルーム	朝の読書週間は、図書館や学級文庫の利用への影響が大きいため、継続していく。	
		読書感想文(夏休み課題)の提出を促す。 (図書情報)	読書感想文の提出が80%以上であった。 読書感想文の提出が70%以上であった。 読書感想文の提出が60%以上であった。 読書感想文の提出が60%未満であった。	Ⓐ Ⓑ _○ Ⓒ Ⓓ	98.4%の提出であった。				
	②新聞を活用した学習活動を推進する。	ホームルーム活動等で、新聞を活用する。 (図書情報)	新聞を活用したホームルームが50%以上であった。 新聞を活用したホームルームが30%以上であった。 新聞を活用したホームルームが20%以上であった。 新聞を活用したホームルームが20%未満であった。	A Ⓑ _○ Ⓒ Ⓓ	41.2%の活用度であった。	B	活動での活用度を上げるため、切り抜き掲示する記事の量や機会を増やしたことが成果に表れた。図書館への入館者は、昨年度比で大幅増加したが、昨年度は長期の臨時休校があったためである。		図書委員による新聞記事の切り抜き掲示は、記事量や機会を増やして、さらに興味を持ちやすくなるようにして、ホームルーム時に活用できる機会が増えるように計画する。
		授業で新聞を活用する。 (図書情報)	新聞を活用した授業者が50%以上であった。 新聞を活用した授業者が30%以上であった。 新聞を活用した授業者が20%以上であった。 新聞を活用した授業者が20%未満であった。	Ⓐ Ⓑ _○ Ⓒ Ⓓ	61.8%の活用度であった。				
	③学校図書館の活用を促進する。	図書館の入館者の数を増やす。(図書情報)	入館者数が5%以上増えた。 入館者数が増えた。 入館者数が増えなかった。 入館者数が5%以上減った。	Ⓐ Ⓑ _○ Ⓒ Ⓓ	昨年度比で30.5%増加した。	A	図書館が利用し易くなる環境づくりや催し行事を設けて、生徒の活動場所の一つとなるようにする。		

重点課題	重点目標	目標達成に向けた取り組み(担当課)	評価の観点	評価	評価指標の達成度と活動計画の実施状況	総合評価	所見	次年度への課題今後の改善方策
8 開かれた学校づくりの推進	①公開授業、中学生体験入学などの教育活動の公開を推進する。	①公開授業を年間2回以上実施する。(企画)	年間2回以上実施し、前年度に比べて参加者の割合が100%以上であった。 年間2回以上実施し、前年度に比べて参加者の割合が100%未満であった。 年間2回以上実施し、前年度に比べて参加者の割合が80%未満であった。 年間2回以上実施し、前年度に比べて参加者の割合が70%未満であった。	Ⓐ B C D	PTA総会が実施されなかったため、公開授業は秋の1回のみとなった。参加者は昨年度と比べて160%であった。	A	公開授業は1回のみとなったが、普段の授業の様子を見たいという保護者の方が参加してくださった。また中学生体験入学は、授業および部活動見学のオープンスクールという形での実施となったが、多くの参加があった。	公開授業が木・金曜日実施であったため、スポーツ科学科は専攻実技の参観であったが、普段の授業を参観できるよう月～水曜日の実施を次年度検討したい。
		②中学生体験入学での授業内容を充実させる。(企画)	体験授業の内容を「よい」と評価した生徒が90%以上であった。 体験授業の内容を「よい」と評価した生徒が80%以上であった。 体験授業の内容を「よい」と評価した生徒が70%以上であった。 体験授業の内容を「よい」と評価した生徒が70%未満であった。	A B C D	今年度も、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、日程等大幅に短縮・変更し、体験授業を実施することができなかった。		次年度は実施方法を工夫して体験が実施できるように検討したい。	
		③学校祭を保護者や中高生・地域の方に開放する。(特別活動)	今年度訪問者数が300人以上であった。 今年度訪問者数が200人以上であった。 今年度訪問者数が150人以上であった。 今年度訪問者数が150人未満であった。	A B C D	渦高祭においては今年度、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から非公開としたため、中高生・地域の方に開放することができなかった。		次年度は中高生・地域、保護者等への周知を工夫し300人以上の訪問者数を維持できるようにしたい。	
	②ホームページ等を利用して迅速な情報発信をする。	メール配信システムなどICT活用を推進する。(図書情報)	メール配信などのICT活用を便利だと感じている生徒が80%以上であった。 メール配信などのICT活用を便利だと感じている生徒が60%以上であった。 メール配信などのICT活用を便利だと感じている生徒が40%以上であった。 メール配信などのICT活用を便利だと感じている生徒が40%未満であった。	Ⓐ B C D	ICTを活用した授業が「わかりやすい」と回答した生徒が62.3%であった。	B	「ICTスキルが身につけていない」と回答する生徒が合計19%いることも判明した。ICT活用授業は概ね「わかりやすい」とはあるが、ICTスキルの差によって、授業の習熟度に大きな差が生じる恐れがある。保護者の78.8%がホームページを見ていることから、常に掲載記事の整理整頓が必要である。	授業や家庭との連絡などでICT機器の利活用は非常に便利だが、これによってデジタルデバイドの問題が生じないように、利活用の状況整備は慎重に進めていく。
		ホームページの内容を適宜更新し、充実を図る。(図書情報)	ホームページアクセス数が月平均1000件以上であった。 ホームページアクセス数が月平均500件以上であった。 ホームページアクセス数が月平均300件以上であった。 ホームページアクセス数が月平均300件未満であった。	Ⓐ B C D	月平均1000件以上で、前年比43.8%増であった。			
	③地域・PTA・同窓会等との情報の共有や連携を円滑にするシステムを構築するとともに、地域の人材の活用を推進する。	①PTA総会の参加者を増加させる。(総務)	参加者が150名以上であった。 参加者が120名以上であった。 参加者が100名以上であった。 参加者が100名未満であった。	A B C D				
②PTA研修を充実させ満足度を上げる。(総務)		参加者の満足度、A・B評価が80%以上であった。 参加者の満足度、A・B評価が50%以上であった。 参加者の満足度、A・B評価が30%以上であった。 参加者の満足度、A・B評価が30%未満であった。	A B C D					

重点課題	重点目標	目標達成に向けた取り組み(担当課)	評価の観点	評価	評価指標の達成度と活動計画の実施状況	総合評価	所見	次年度への課題 今後の改善方策
9 グローバル教育	①郷土の伝統・文化について理解を深める教育を推進する。	①「産業社会と人間」を通して徳島県や鳴門市の自然・歴史・文化・産業の素晴らしさを認識させる。(総合学科)	郷土の自然・歴史・文化・産業を誇りに思える生徒が70%以上であった。 郷土の自然・歴史・文化・産業を誇りに思える生徒が60%以上であった。 郷土の自然・歴史・文化・産業を誇りに思える生徒が50%以上であった。 郷土の自然・歴史・文化・産業を誇りに思える生徒が50%未満であった。	A B C D	「そう思う」と回答した生徒が27.1%、「ややそう思う」と回答した生徒が34.3%で、合計61.4%であった。	B	講演や実地体験、調査・研究などを通じ、より深く郷土について理解することができた。	「産業社会と人間」を通じて学んだことを、実際の社会と重ね合わせて見ることで、より深い理解を追究していく。
		②インターンシップや「総学」の時間を通じ、地元へ根付き、貢献している産業・文化・歴史についての理解を深めさせる。(総合学科)	地元の産業・企業の活躍を誇りに思える生徒が70%以上であった。 地元の産業・企業の活躍を誇りに思える生徒が60%以上であった。 地元の産業・企業の活躍を誇りに思える生徒が50%以上であった。 地元の産業・企業の活躍を誇りに思える生徒が50%未満であった。	A B C D	地元の産業・企業の活躍を誇りに思い、地元企業に就職し、地元へ貢献したいというが70%以上であった。	A	地元の産業・企業の活躍を誇りに思う気持ちを高め、愛着を醸成できた。	インターンシップの実施は難しいかも知れないが、代替となるものを計画していきたい。
	②異文化理解学習を通じて共生の精神の涵養を図る。	①授業等の教育活動を通して、海外の習慣や文化に触れ、日本の文化との共通点や相違点についての理解を深めさせる。(国際交流)	世界には多様な文化があることを理解した生徒が70%以上であった。 世界には多様な文化があることを理解した生徒が60%以上であった。 世界には多様な文化があることを理解した生徒が50%以上であった。 世界には多様な文化があることを理解した生徒が50%未満であった。	A B C D	「十分理解できた」と回答した生徒が26.9%、「少し理解できた」と回答した生徒が51.1%で、合計78.0%であった。	B	各教科におけるICTを利用した授業を通じ、海外の風景や文化に触れる機会を多く持つことができた。新しいALTのマーク先生と交流を持ち、学習意欲の向上につながった。台湾交流については、姉妹校提携を周知するための事前学習を継続していくことで、生徒の興味関心の向上を図る。	今年度はコロナウイルス感染拡大防止のため、本校生徒の台湾訪問が延期になった。交流再開時には、日本の伝統文化を伝えることをテーマに、本校生徒が台湾新竹市立成徳高級中学を訪問する予定となっている。台湾交流については、姉妹校提携を周知するための事前学習を継続していくことで、生徒の興味関心の向上を図る。
		③ALTの先生などとの交流を通して、異文化を尊重し、自国の文化を誇りに思い、共生していく姿勢を培う。(国際交流)	異文化尊重と共生の精神について理解した生徒が70%以上であった。 異文化尊重と共生の精神について理解した生徒が60%以上であった。 異文化尊重と共生の精神について理解した生徒が50%以上であった。 異文化尊重と共生の精神について理解した生徒が50%未満であった。	A B C D	「よくできた」と回答した生徒が32.1%、「できた」と回答した生徒が48.7%で、合計80.8%だった。			
③次年度の台湾の学生との交流活動に向けた事前学習を行う。(国際交流)		台湾の学生との交流活動に向けた事前学習を行い、興味・関心を持った生徒が70%以上であった。 台湾の学生との交流活動に向けた事前学習を行い、興味・関心を持った生徒が60%以上であった。 台湾の学生との交流活動に向けた事前学習を行い、興味・関心を持った生徒が50%以上であった。 台湾の学生との交流活動に向けた事前学習を行い、興味・関心を持った生徒が50%未満であった。	A B C D	「よくできた」と回答した生徒が17.4%、「できた」と回答した生徒が36.9%で、合計54.3%だった。				
③スポーツ等を通じた国際交流を推進する。	①競技を通して海外の学生と交流する機会を設ける。(スポーツ科学科)	国際大会や交流会等に参加する機会を設け、競技を通じた国際交流に積極的に取り組んだ。 国際大会や交流会等に参加する機会を設け、競技を通じた国際交流に取り組んだ。 国際大会や交流会等に参加する機会を設けたが、競技を通じた国際交流に取り組めなかった。 国際大会や交流会等に参加する機会を設けられなかった。	A B C D	コロナ禍にあって国際交流は実質的に困難であった。	D	国際大会、オリンピックなどの公式試合は開催されるようになってきた。積極的に交流に興味・関心を持つことが8.8%存在する。	コロナ禍での国際交流の方策をSNS等を通じ検討していく必要がある。	

重点課題	重点目標	目標達成に向けた取り組み(担当課)	評価の観点	評価	評価指標の達成度と活動計画の実施状況	総合評価	所見	次年度への課題 今後の改善方策
10 学校運営体制の充実	①教職員のコンプライアンス意識の高揚を図る。	①学校活動の様々な機会をとらえて、効果的な研修の機会を設ける。	年間を通じて8回以上研修の機会を設けた。 年間を通じて6回以上研修の機会を設けた。 年間を通じて5回以上研修の機会を設けた。 年間を通じて研修の機会が5回未満にとどまった。	Ⓐ Ⓑ ₁ Ⓒ Ⓓ	各学期始めと終わりの職員会議において全体研修会を開催するとともに、職員朝礼において時機を捉えた注意喚起を行うことができた。	A	日常的な研修・定期的な研修を実施するとともに、不祥事根絶対策タスクフォースを活用した研修を実施し信頼される学校の確率に向け意識が高まった。	コンプライアンス意識の高まりを継続さらに高めるため、様々な視点からの研修を取り入れ、研修の質を高めていく。
		②研修の内容を精選し、受講する教職員の理解度を高める。	全教職員の90%以上が理解度が高まったと考えている。 全教職員の80%以上が理解度が高まったと考えている。 全教職員の70%以上が理解度が高まったと考えている。 理解度が高まったと考える教職員が70%未満にとどまっている。	Ⓐ Ⓑ ₁ Ⓒ Ⓓ	研修によって、コンプライアンスに対する理解が深まったと思う職員は97.0%であった。			
	②危機管理態勢の徹底を図る。	①安全教育・防災教育をはじめ危機管理に関する理解を深め、危機を予測し対応できる能力と体制を整える。	全教職員の80%以上が、安全教育・防災教育の知識・技術を身につけている。 全教職員の70%以上が、安全教育・防災教育の知識・技術を身につけている。 全教職員の60%以上が、安全教育・防災教育の知識・技術を身につけている。 安全教育・防災教育の知識・技術を身につけていると考えている職員が、全体の60%未満にとどまった。	Ⓐ Ⓑ ₁ Ⓒ Ⓓ	心肺蘇生・AED講習会に参加し、心肺蘇生・AEDの知識と技術が習得できた職員が100%であった。	A	防災に関しては心肺蘇生・AEDの研修を行うなど、より実践的な取り組みを志向している。また職員が、めざすべき生徒像について書面を用いて意見を出し合い、その内容を共有する研修を行った。	講習会を開催し積極的に参加し防災に対する意識の向上をはか、危機管理能力を高めていく必要がある。また、教職員間のコミュニケーションを密にすることにより、意識の共有が図られ「風通しの良い職場」を推進することができる。
		②教職員間の日頃のコミュニケーションを密にするとともに、「風通しの良い職場環境作り」に配慮し、創造的な意見を出しやすい環境を整える。	全教職員の85%以上が、「風通しの良い職場」であると考えている。 全教職員の75%以上が、「風通しの良い職場」であると考えている。 全教職員の65%以上が、「風通しの良い職場」であると考えている。 「風通しの良い職場」であると考えている職員が、全体の65%未満にとどまった。	Ⓐ Ⓑ ₁ Ⓒ Ⓓ	「風通しの良い職場」だと思う職員が91.1%であった。まためざすべき生徒像の職員共通理解の研修を継続した。			
	③学校価値の創造を推進する新規事業の創出、地域の人材づくり、国際交流等、新しい企画を推進するとともに、課題解決に向けた協働体制を確立する。	①地域に貢献できる人材の育成を期待できる事業創出する。(NEXT)	地域の事業に生徒が参加協力し、全体として共に運営する機会を造った。 地域の事業に生徒が参加協力する機会を造った。 生徒に地域の事業に関する広報を行った。 地域の事業に関する協力の依頼があった。	Ⓐ Ⓑ ₁ Ⓒ Ⓓ	新型コロナウイルスの感染状況を踏まえ、取組において工夫を重ねるとともに、SDGs達成に向けて学校全体で取り組むことができた。	A	新型コロナウイルス感染症の影響により、地域の事業に参画する機会は減少したが、アフターコロナを見据え、商品開発やマーケティング調査等に取り組んだ。	地域の方々と学校の交流だけでなく地域と地域の方々をつなぐ企画へと発展させるとともに、制約がある中でも工夫を重ねて継続することが必要である。
		②各校務分掌の課長を中心に、本校の教育目標を理解し、その達成に向けた運営を行う。	課長を中心に教育目標の達成を意識した運営ができた。 教育目標を意識した運営ができていたが、一部不十分な点があった。 不十分な点もあるが、一部で教育目標を意識した運営ができていた。 教育目標の理解が不十分で達成できないケースが目立った。	Ⓐ Ⓑ ₁ Ⓒ Ⓓ	課長を中心に教育目標の達成を意識した運営ができたとする職員と、教育目標を意識した運営ができたとする職員を併せると94.1%であった。			
		③教職員が地域の教育拠点としての学校を意識した協働体制を図る。	協働体制による活動が円滑に実施され、所期の目的を達成した。 おおむね円滑に実施できたが、一部に不十分な点が見られた。 不十分な点も多々あったが、効果的な部分もみられた。 活動を円滑に実施することができなかった。	Ⓐ Ⓑ ₁ Ⓒ Ⓓ	協働体制による活動が円滑に実施され、所期の目的を達成したと、おおむね円滑に実施できたとする職員が併せて97%であった。			

重点課題	重点目標	目標達成に向けた取り組み (担当課)	評価の観点	評価	評価指標の達成度と活動計画 の実施状況	総合 評価	所見	次年度への課題 今後の改善方策
11 食育の 推進	①食育に対する知識 と理解を深め、健康増 進を図る。	①自身の食生活を振り返ることにより、栄 養バランスを意識して食生活を送ることが できる。(食育コーディネーター)	生徒の80%以上が栄養バランスを意識した食生活を送ることができている。 生徒の70%以上が栄養バランスを意識した食生活を送ることができている。 生徒の60%以上が栄養バランスを意識した食生活を送ることができている。 生徒の60%未満が栄養バランスを意識した食生活を送ることができている。	A B C D	76%の生徒が栄養バランスを意識 して食生活をおくることができてい る。	B	小・中学生の頃から食育について指 導を受けており、 食生活を意識して 生活ができている。 しかし、生活 リズムの乱れから 実践に結びついて いない生徒もい る。競技力向上に 食事が大切な要素 の一つであることを 理解できており、 補食についても 高い意識を持つ ている。	食に関する意識は向上 している一方、毎日の 食生活に反映すること ができていない生徒が いる現状を踏まえ、生 活リズムの改善も含め 指導をしていく必要が ある。
		②料理コンテストに応募することにより、 食に関して興味・関心をもつ。(食育コー ディネーター)	家庭科の授業において生徒の90%以上が料理コンテストに応募した。 家庭科の授業において生徒の80%以上が料理コンテストに応募した。 家庭科の授業において生徒の70%以上が料理コンテストに応募した。 家庭科の授業において生徒の70%未満が料理コンテストに応募した。	A B C D	家庭科の授業での課題として、料 理コンテストに85%の生徒が応募し た。			
	②食育を通じて競技 力の向上を図る。	①食事バランスガイドについて理解し、食 生活に利用することができる。(食育コー ディネーター)	生徒の70%以上が食事バランスガイドについて理解している。 生徒の60%以上が食事バランスガイドについて理解している。 生徒の50%以上が食事バランスガイドについて理解している。 生徒の50%未満が食事バランスガイドについて理解している。	A B C D	52%の生徒が食事バランスガイドに ついて理解することができていた。	B		食事バランスガイドは以 前よりも、店頭で使用され ることが少なくなっており、 今後は毎日の食生活 の利用には食品群を用い るよう指導していく予定で ある。
		②競技力の向上のために補食を意識し て、間食に気を付けることができる。(食育 コーディネーター)	生徒の60%以上が間食に気を付けている。 生徒の50%以上が間食に気を付けている。 生徒の40%以上が間食に気を付けている。 生徒の40%未満が間食に気を付けている。	A B C D	スポーツ科学科において80%の生 徒が間食の際、補食を意識するこ とができた。			